

毎日を意味のあるように生きる
ただそのために歌ってきた

綾戸智恵氏

ジャズシンガー



Chie Ayado _1957年大阪府生まれ。1998年、40歳にしてアルバム『For All We Know』でプロデビュー。以後、精力的にライブやアルバム制作を行い、テレビでも人気に。2008年7月より母の介護のためにライブ活動を休止するが、2009年9月に再開。2010年7月には自主制作盤として幻の名盤とされていた『ONLY YOU』が一般発売、9月には「MY WAY」コンサートのDVDをリリースした。著書に『マイ・ライフ』（幻冬舎）など。

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 大久保幸夫、泉 彩子
Text = 泉 彩子 (68~70P)
大久保幸夫 (71P)
Photo = 刑部友康

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

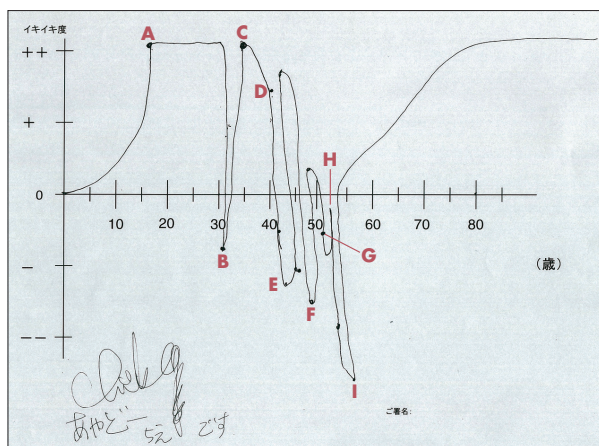
綾戸智恵氏 キャリアヒストリー

1957年	0歳	大阪府生まれ。父は味噌店経営で、母は相場師。3歳からクラシックピアノを始め、小学生にしてジャズやゴスペル、洋画に夢中になる
1973年	16歳	ピアノの師匠・真木利一氏の紹介でジャズクラブで歌い、ギャラをもらうようになる。日給1万円
1975年	17歳	「シナトラがいる国」への憧れから、単身ロサンゼルスへ。高校卒業後はアルバイトでお金を貯めては渡米し、ジャズクラブに通った
1987年	30歳	ニューヨークに長期滞在。左胸の乳がんを摘出
1989年	32歳	音楽仲間のアフリカ系アメリカ人と結婚。翌年に長男を出産
1991年	34歳	離婚を決め、息子とともに帰国。英語教師などで生活費を稼ぎつつ、音楽活動も行う
1998年	40歳	プロデビュー。アルバム『For All We Know』『Your Songs』をリリース。右胸の乳がんを摘出
1999年	41歳	初のソロ・アルバム『Life』が大ヒット。2003年にはNHK紅白歌合戦に出場する
2008年	50歳	10周年記念公演を区切りにコンサート活動を休止。母の介護に専念する
2009年	51歳	コンサート活動を再開。全国を巡っている



「MY WAY」コンサートでは原信夫氏、シャープス&フラッツと共演

Photo by Eishun Ikeda 2010



直筆の人生グラフ。40歳でデビュー後、10年間の波が激しい。「病気がたり、母が倒れたりもしたからね。そのたびに歌で這い上がってきた感じです」

- A. ジャズクラブで歌い始める B. 乳がん発覚 C. 帰国 D. プロデビュー
E. 再発の不安 F. 事務所との関係に悩む G. 活動休止
H. 活動再開 I. 介護と音楽活動との両立による疲れで倒れる

常に直球。インタビューは綾戸智恵氏の「前置きはええから、なんでも聞いて」という言葉で始まった。大阪の主婦から40歳でプロデビュー。明るい気質が買われ、テレビ番組やCM、映画でも活躍するが、聴衆と一体化するコンサートこそが真骨頂。全身から絞り出すようなハスキーな声で、ジャズのスタンダードナンバーからポップスまで、どんな曲も独自の歌にして聴かせる。

日本のジャズの世界は 会社よりもキツイと思った

両親の趣味の影響で、ジャズやゴスペルを聴いて育った。初めてステージで歌ったのは、小学校5年生のとき。高校1年生からはギャラをもらうようになった。

「歌って、お客さんにウケたら、お金までもらえた(笑)。歌手になりたいというよりは、自分の技術でお金をもらえるなんて楽しいなあという感覚でした」

アメリカの空気に憧れ、高校3年生の1学期に一人旅でロサンゼルスへ。卒業後はアルバイトをしては渡米し、ジャズクラブに通った。飛び入りで、マッコイ・タイナーなど有名プレイヤーとのセッションも経験している。大阪のライブハウスでも演奏したが、当時の日本のジャズ界にはなじめなかったという。

「みんな過去の巨匠の話ばかりするんですよ。それに、ステージで先輩より目立った演奏をすると、怒られるのも不思議でした。楽屋での礼儀はわきまえていたつもりだけど、ステージでは平等でしょ？ ジャズの世界は自由なはずなのに、会社よりもキツイなと思って(笑)」

日本よりもアメリカのほうが水に合うと20代後半からはニューヨークに生活の拠点を移した。そんな綾戸氏が日本に戻ったのは、34歳のとき。アメリカ人の夫と離婚し、母と長男と暮らすためだった。

「帰国後は英語や歌を教えたり、給食のおばちゃんをしたり、いろいろやりました。座敷がかかればライブにも出ましたが、音楽だけでやっていくというのは計画がありませんでした。家族3人が苦勞せずに食べていけることが何よりも大事やったからね」

「歌えるオバハン」に戻る覚悟で作った 初めてのソロ・アルバムでブレイク

乳がん治療の副作用から、声が出なくなった時期があ

る。だが、腹式の発声法を体得して再び歌えるようになり、結果的には独自の表現につながった。

40歳、仲間に誘われて出演した「八ヶ岳ジャズフェスティバル」でジャズ評論家の内田修氏に見出され、プロデビュー。しかし、体調の不安は常にあった。デビュー直後には右胸の乳がんを切除する手術も受けている。

「病気はするし、若くもないのに、前の仕事もやめてしまっ、大丈夫なんかなあと迷いもありました。でも、偶然を必然にするのは自分。いっちょ頑張ったろうと。その後は、ただお客さんの反応がうれしくて歌い続けていました」

デビューした年には2枚のアルバムをリリース。ベテランのピアノ・トリオの演奏でジャズのスタンダード曲を歌い、本場仕込みの歌唱力がジャズ界から絶賛された。だが、その裏でもどかしさも感じていたという。

「この2枚は大好きですが、私というより、バンドのアルバムだったんです。選曲もアレンジもどこか自分を出し切れない感じで。だけど、何にもわかっていない自分が口出しなんかしたら怒られるんちゃうかなと、バンドメンバーの言う通りに歌いました」

綾戸氏が自らの出発点と考えているのは、弾き語り中心で作った3枚目のアルバム『Life』。ジョン・コルトレーンの名曲からSMAPのヒット曲までジャンルを問わず、自分の好きな曲を演奏した初のソロ・アルバムだ。「ライブでは弾き語りもやり、お客さんには好評でしたが、前の2枚のアルバムには入れていませんでした。バンドのピアニストから、私のピアノはプロとしては通用しないとされていたんです。だけど、ずっとお人形のままでいるのはイヤやなと思って。バンドから離れてや



りたいことをやろうと『Life』を作りました。ダメだったら、ただの『歌えるオバハン』に戻る覚悟でした」

このアルバムが大ヒット。テレビ出演が増えて人柄が知られるようになると、綾戸氏の生き方にも注目が集まり、瞬く間に人気アーティストとなった。

コンサート活動を休止し、介護に専念 歌の大切さに改めて気づいた

1年に2枚のペースでアルバムを出し、年間100本以上行方コンサートは常に満席。順風満帆だった47歳のとき、母が脳梗塞に倒れ、歌い続けながら介護をした。

「いつも励ましてくれた母が、そばに娘を置きたい一心で私が歌うのを嫌がるようになりました。でも、仕事に穴は開けられない。悩み抜いて、10周年記念公演を節目にコンサート活動をやめて介護に専念しました」

だが、母につきっきりの生活で精神的に追いつめられ、気がつくとも母と心中することまで考えていた。1年3カ月後に復帰したのは、そんな自分に危機感を抱き、本来の姿を取り戻そうとしての選択だった。しかし、今度は介護と仕事の両立で体力が持たなかった。疲れから精神安定剤を多めに服用し、昏睡状態で病院に運ばれた。

「人間、気力は尽きなくても、体力には限界がある。1人で抱え込みすぎではいけないと初めて学びました」

介護に専門家の力を借りることで、歌うことを以前にも増して楽しめるようになった。2010年も初秋から翌春にかけて全国ツアーで各地を巡り、笑いと感動を与える。「私が歌うには家族が絶対必要だし、家族のためには歌が必要。介護を経験して歌の大切さに改めて気づきました。でも、何かを犠牲にしてまでは歌いません。そんな尖ったミュージシャンじゃないんです。お客さんや家族、友だちの喜ぶ顔が見たいだけのオバハンなんですよ」

最近ではドラマや映画にも出演している綾戸氏。新しいことには常に挑戦していきたいと考えている。

「ずっと歌っていききたいとは言い切りません。生きていたいんです。生きるために歌ってきて、歌が私の軸だということは間違いないし、大事にします。だけど、この先、何が起るかなんて神様にしかわからないんだから、決めつけられないほうが楽しいじゃないですか。私ね、『何歳だからこうあらねば』とは考えないんです。ただ毎日を意味のあるように生きていきたいと思っています」

■ 綾戸智恵氏のキャリアをこう見る

「じぶんの年齢で生きる」綾戸智恵流の老い方哲学

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

2000年に出版された『綾戸智恵 ジャズレッスン』（KTC中央出版）のなかに、面白い文章があった。彼女が夢を聞かれて、「老けないように老けていきたい」と語っているのである。真意は、できるのにしなかったり、できもしないことを大きな声で言ったりするようなことはせず、自分を裏切らないように淡々と生きていきたいということのようだ。「いやにならないように歳をとりたい」とも言い換えている。

遅咲きのプロデビューを果たした彼女らしい人生観だと感じたが、それから10年の年月が経ち、親の介護や自身の病気なども経験しているので、どのような変化があったか、改めてその人生観を尋ねてみることにした。

彼女の口から出てきたのは、「世間の年齢に合わせずに、じぶんの年齢で生きていきたい」「生きている意味を感じながら、意味のある歳のとり方をしていきたい」という、決意を込めた言葉だった。

年齢には、生まれたときからの時間で計る暦

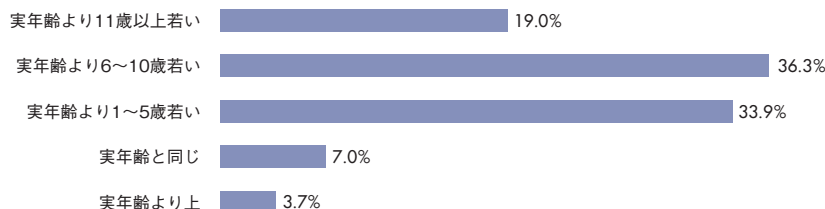
年齢のほか、頭の働きや感情の働きで計る心理的年齢や、仕事における役割などで計る社会的年齢がある。

「世間の年齢に合わせず」というのは、暦年齢が何歳だから当然こうあるべき、というような考え方に振り回されずに、「じぶんの年齢で」というのは自分の心のままに生きたいという思いであり、同時に時間を積み重ねた意味は大事にしたいということなのだろう。

暦年齢でいうところの40歳でのプロデビューや、50歳を超えて介護をしながらのコンサートツアーなどは、同世代に勇気を与えるに違いない。その昔、50歳で家督を譲り、全国を測量する旅に出た伊能忠敬のように。

以前、ワークス研究所が55歳から74歳を対象に行った調査では、約90%の人が暦年齢よりも自分は若いと思っているという結果が出た。「じぶんの年齢で生きる」と宣言する綾戸氏は、そのような人々のロールモデルになっていくのかもしれない。

◆ 心理的年齢と暦年齢の差 → 約90%は暦年齢より若い



出典：リクルートワークス研究所
「シニアの就業意識調査」2006年